

18 世紀におけるオイラト=イフフレー・チベット・清 朝間のネットワーク ——新疆新発見のチベット語文書を中心に——¹

[紐約] 孔令偉

[東京] 村上信明 訳

近年、新疆イリ・テクス県で欠損のない2件のチベット語文書が発見された。もとは当地域のチベット仏教寺院に収蔵されており、筆者の考証の限りでは、これらは1771年にヴォルガ河（Volga River）流域から東帰したトルグート人が携帯してきたものである。この残存する2件のチベット語文書史料は、歴史家が17世紀から18世紀にかけてのオイラト・チベット及び清朝の三者間のネットワークを探求するうえで新たな扉を開くものとなった。チベット語檔案・トド語史籍と清朝の政府側文献を総合的に見ると、ザヤパンディタの圓寂後にその弟子が組織したオイラト=イフフレー（Oyirad-un yeke küriye）は、1676年にイルティッシュ河（Irtysh River）から今日のロシアのヴォルガ河流域一帯に移動し、トルグート人との連携を築き、これ以降トルグートがチベット・清朝と連携をとる際の重要な架け橋となったことが見えてくる。この現存のチベット語檔案からは、17世紀以来、地理的な隔絶やロシアの妨害がありながらも、トルグート人が依然としてオイラト=イフフレーを通じてチベットのガンデンポタン（ダライラマ政権）と密接

¹ 筆者は2017年7月16日にこの論文の原稿を『野尻湖クリルタイ：日本アルタイ学会』で発表した。村上信明教授は筆者の発表稿を中国語から日本語まで翻訳してくださった。岩田啓介博士（日本学術振興会特別研究員PD、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）も筆者に多くの有益な助言と示唆を与えてくださった。筆者は村上と岩田先生に厚く感謝の意を表したいと存じる。

な連携を保っていたことを確認できる。このユーラシア大陸を横断する連携ネットワークは、清朝の内陸アジア边疆に対する政策に広く影響しただけでなく、トルグートが数度にわたり北京に迂回していき、チベットへ巡礼の旅をすることを促進した。グローバルヒストリーの視点から見れば、オイラト=イフプレーはモンゴル・チベット双方の政治・宗教上の交流を深化させただけでなく、18世紀の東アジアと内陸アジアのグローバル化の進展を推し進めたといえる。本文の最後では、18世紀後半のオイラト=イフプレーが清帝国の边疆秩序にどのように組み込まれたのか、また最終的に彼らが歴史の舞台からどのように消えていったのか、その過程を検討する。

18世紀のチベットとトルグートの間の往来文書

中央ユーラシア地域に居住するトルグート人は、清朝とロシアの二大帝国が対峙するようになる過程において相当に重要な役割を演じた。17世紀初頭、元来今日の新疆北部一帯に住んでいたトルグート人は、ジュンガルの興起によって今日のロシア境界内のヴォルガ河流域に移住した。18世紀後半、トルグート人はロシア政府との齟齬や清朝の招撫によって新疆に戻った。17世紀から18世紀のこの期間に、ユーラシア大陸の両端を移動したトルグート人は、中国・ロシア双方の広範な交流をうながしただけでなく、ユーラシア大陸のグローバル化をさらに深化させた。

トルグート人が1770年から1771年にかけて東帰した歴史的背景については、Paul Pelliot¹、宮脇淳子²、Michael Khodarkovsky³、Nicolai Palmov⁴、馬汝珩・馬大正⁵などの学者によってすでに多くの検討がなされてきた。一般的には、トルグートが東帰したおもな要因として、ロシアがトルグートを強制的に兵として徴発したこと以外に、トルグート人のチベット仏教信仰とロシアの東方正教会政策の衝突もキーポイントであったと認識されている。乾隆帝は『御製土爾扈特全部帰順記』の中で、「今のハンのウバシは、アユキの曾孫である。……ロシアは別の教をもち、

¹ Paul Pelliot, *Notes Critiques d'Histoire Kalmouke* (Paris: Librairie d'Amérique et d'Orient, 1960).

² 宮脇淳子：「トルグート部の発展——17～18世紀中央ユーラシアの游牧王権」『アジア・アフリカ言語文化研究』No.42, 1991年。

³ Michael Khodarkovsky, *Where Two Worlds Met: The Russian State and the Kalmyk Nomads, 1600-1771* (Ithaca: Cornell University Press, 1992).

⁴ Николай Николаевич Пальмов, *Очерк истории калмыцкого народа за время его пребывания в пределах России* (Элиста: Калмыцкое книжное изд-во, 1992).

⁵ 馬汝珩・馬大正、『飄落異域的民族：17至18世紀的土爾扈特蒙古』中国社会科学出版社，2003年。

黄教（チベット仏教ゲルク派）ではないので、一族のタイジと密謀し、全員を引き連れて黄教が興隆している中国に身を投じ、それにより身を休めようとしたのだ¹と述べている。ここから、トルグートのチベット仏教ゲルク派に対する崇信が彼らに東帰をうながした重要な要因であったことがうかがえる。しかし 18 世紀後半のトルグートの東帰以前におけるチベットの政治・宗教指導者との交流に関しては、長いあいだ詳細な研究がなされてこなかった。近年にいたり、このことに関連する満文檔案が出版され、研究者は清朝側の記録を通じて革新的な研究を行なうようになった²。しかしそうはいつても、史料が乏しいため、学界ではトルグート人とチベット側との直接的な文書の交流についての基本的な認識がいまだ不足している。

幸運なことに、オイラト学とモンゴル史研究者の長期にわたる新疆地区でのフィールド調査の進展にともない、様々な言語で書かれた貴重な地域文献がより多く発見されるようになり、これにより歴史家の認識が改められることとなった。例えば、近年イリ・カザフ自治州テクス県で発見された 2 件のチベット語文書は、18 世紀のトルグートとチベットの交流に関する研究にとって重要な鍵となる史料であることは疑いない。新疆にあるこの 2 件のチベット語文書は、中央民族大学のエルデムト（Erdemtu Minggad）教授がイリ・テクス県でトド語文献を調査したときに発見し撮影したものである。エルデムト教授のテクスでの現地調査の結果によれば、この 2 件の文書は 1970 年代以前には現地の民衆が「アルダルカブチ=フレー」（aldar kabči-yin küriye）と呼ぶ寺院のなかに所蔵されていたとのことである。この寺院は外壁が赤土で塗られていることから、俗に「ウラン=フレー」（Ulayan Küriye）と呼ばれていたことが伝わっており、これはモンゴル語で「紅い寺」の意味である³。この新疆発見のチベット語文書に関する筆者の考証によれば、これらは 18 世紀に作成され、ダライラマとネーチュン護法神（gnas chung chos skyong）から別々に送られてきたもので、その文面は濃厚な宗教的色彩を有している。以下、まずはそれぞれの文書について簡単な紹介と解釈を行っていく。

トルグートとチベット・ガンデンポタンの間の政治・宗教上の関係

¹ 清高宗：『御製詩文十全集』、武英殿聚珍本、20 頁-b。

² 烏雲畢力格：「土爾扈特汗廷与西藏関係（1643—1732）——以軍機处滿文錄副文件記載為中心」『西域研究』2015 年第 1 期。

³ この寺院は 1984 年に再建され、現在はテクス県城の西北 4 キロの場所（GPS 座標：43°14'59.10"N, 81°48'16.06"E）にある。1945 年から 1951 年の間、テクスはクズルクルに改名されたことがあるが、その名称はこの寺院（Qizil はカザフ語で紅色を意味し、モンゴル語の Ulayan に相当する）から付けられた。

1 件目のチベット語文書について、筆者は『鉄猪年ダライラマ諭令』という題をつけた。最初の表題と文書右下の角にある印璽の称号からは、この手紙の署名者がダライラマであることがはっきりと分かる。文末には書信の作成日が「鉄猪年 11 月下旬」(lcags phag mgo zla ba'i dmar phyogs) であることがはっきりと記されている。しかしここで問題となるのが、この書信の作成者がダライラマの何世なのか、チベット暦の鉄猪年とは具体的に何年なのか、ということである。満文・チベット文・漢文の印文の仔細な考察を通じて、この書信で使われた印璽はダライラマ 7 世ケルサン=ギャツォのもので¹、作成年代の鉄猪年とは 1731 年(雍正 9 年)であると断定することができる。この文書の中で、ダライラマ 7 世ケルサン=ギャツォは鬼衆に勅令をくだし、ガワンルンドゥブ (Ngag dbang lhun grub) という名の人物を傷つけてはならず、法のごとく修習することを成就する順縁たるよう協力すべきである、そうでなければ今の閻魔大王が怖ろしい姿をあらわし、教えに違反した鬼衆に厳しく懲罰を加える、と述べている。関連史料がほかにないため、今のところガワンルンドゥブがどのような人で、どのような事績があるのかを考証することは難しいが、文書のコンテキストから見ると、ガワンルンドゥブはおそらく三宝に帰依し、仏教を修習し成就した僧侶であったと思われる。当時、ガワンルンドゥブ本人はある種の外的な力による間違いがおこったようで(例えば病気になる、死亡するなど)、そこでダライラマ 7 世はおそらくある種の魔物を駆逐する儀式をおこなうために、この文書を残したのだろう。

ガワンルンドゥブの人物像・事績については史料不足によって考証が難しいが、全体的な歴史的背景からアプローチすれば、この『鉄猪年ダライラマ諭令』は相当に重要な歴史的価値を有するといえる。1717 年、ジューンガル部のツェワンラプタン (Cewang araptan, 1665-1727) が大ツェリンダンドブ (Cering dundob, ?-1736) を派遣し、今日の新疆南部のホータンを経由してラサを奇襲してラサン=ハン

(Lazang qan, ?-1717) を殺害した。これによりチベット政権はジューンガル人の手中に落ち、ホシュート=ハン体制が滅び、全チベットの政治情勢が大きく変化した。1720 年、清朝軍はチベット進入に成功し、ジューンガル人を駆逐したのち、ダライラマ 7 世ケルサンギャツォを西寧のタール寺から迎えてラサのポタラ宮にうつし、坐床させた。清朝はディバ (sde srid) の職位を撤廃し、5 人のカロン (bka' blon) による共同執政の体制に改めた。カンチェンネー (Khang chen nas, ?-1727) はジューンガル部を駆逐する過程で大きな功績をあげ、清朝からカロンに封じられ、チベット事務を統括した。しかし 1727 年、清朝が支持するカロンの間で内紛がおこり、カンチェンネーはカロンの一人であるガポーパ (Nga phod pa, ?-1728)

¹ 歴代ダライラマの印文に関しては、陳金鐘「中央政府頒授歴代達賴・班禪之金冊金印」『中国藏学』1996 年第 1 期を参照。

によって殺害された。政局が動揺するなかで、清朝はついに 1728 年にダライラマ 7 世を四川省のリタンに移して住ませた。1730 年、ダライラマ 7 世は四川の泰寧の恵遠廟（現在の四川省甘孜州道孚県の境内）に移り住み、1735 年になってからチベットに戻った。

注目すべきは、1731 年末はちょうど『鉄猪年ダライラマ諭令』が書かれた時であり、ダライラマ 7 世が四川の泰寧でヴォルガ河流域から遠路はるばる訪れた珍しい客——トルグート使節団と接見した時期だったことである。1724 年、トルグートのアユキ=ハンが死去し、その子のツェリンドンドブが即位した。ジュンガル人との対立、虎視眈々と利益をねらうロシアの動き、トルグート内部でのハン位をめぐる争いがあるなかで、ツェリンドンドブは 1730 年に清朝とダライラマに向けて使者を派遣し、外部勢力からの承認によって自身の政治的地位を固めようとはかった。満文檔案によれば、トルグート使節団派遣の主要な目的の一つは、ダライラマに新任のトルグート=ハンを認可してもらい、ハン号を賜うよう求めることであった¹。敬虔なチベット仏教徒であるトルグートでは、ダライラマの認可は新任のハンであるツェリンドンドブが内部の信託を集めるうえでの助けになった。このほか、仏教を篤信するトルグートの僧俗は、ダライラマから福德を授かり加持を賜うことを望んでいた。このためトルグート使節団は 1731 年 10 月に泰寧に到着し、ダライラマに謁見した際、トルグートで往生した貴人のために超度法事を行なうよう請い求めた。『ダライラマ 7 世伝』には次のように記されている。

このとき、トルグートのアユキ王 (thor god a'a yu She rgyal po) が死去し、善根を成就したナンカゲロン (nam mkha' dge slong) など多くの人がやってきて、真珠等の宝石・金糸の緞子、及び珍しい贈り物を献上し、アユキ王などすでに亡くなった高貴な人のために回向をすることを請い求めた。また名簿に書かれている死者のために、彼らが天界に安立して善道を解脱するよう超薦の儀式を行いうことを請い求めた。トルグートの使者 (蔵 el chi<蒙 elci) らの求めに応じて、懺文を書いた。²

¹ 1730～1732 年におけるトルグート使節団の行程と使節派遣の目的についての考察に関しては、烏雲畢力格：「土爾扈特汗廷与西藏關係（1643—1732）——以軍機處滿文錄副文件記載為中心」『西域研究』2015 年第 1 期を参照。

² チベット語原文：'di skabs thor god a'a yu She rgyal po dus chos su gyur pa'i dge rtsa sgrub mi nam mkha' dge slong sogs mi sna gtos che ba 'byor/ a'a yu She rgyal po sogs phyogs de'i mi chen 'das pa rnams kyi don du mu tig dang rin po che ngo mtshar ba sogs dang/ rgya ser gyi gos dar dang dpyad pa ya mtshan pa'i 'bul ba mang du phul te gsol ba btan pa ltar ljogs bsngo dang/ gshin pode dag gi ming byang la sbyang chog sogs mdzad de mtho ris dang thar pa'i lam bzang mchog la 'god par mdzad/ thor god kyi el chi rnams kyi bs kul ngor rje nyid kyi zhabs brtan smon tshig bka' rtsoms gnang//

原文は、Rol pa'i rdo rje, *Skal bzang rgya mtsho'i rnam thar*, Lhasa: bod ljongs mi dmangs dpe skrun khang, 1990, p. 273. を参照。この箇所は、蒲文成の訳文を修正して作成したものである。章嘉・若貝多傑著、蒲文成訳：『七世達賴喇嘛伝』中国蔵学出版社、2006 年、108 頁を参照。

このときの歴史的背景を理解すると、『鉄猪年ダライラマ諭令』のコンテキストがさらにはっきりしてくる。明らかなのは、この文書はダライラマ7世が故人であるトルグート貴人のために書いた超度懺文だということである。そしてこの文書の中でダライラマが護持するガワンルンドゥップとは、トルグート部の過去の貴人であろう。では、なぜこの文書が今日の新疆境内に流伝したのだろうか。1732年、トルグートは四川からヴォルガ河流域に戻る道程で、ジューンガル人に敵対視されたことで新疆を通る道を選ばず、四川省から迂回して北京に入り、シベリアからロシアを通過して最後にヴォルガ河流域に戻った。したがって『鉄猪年ダライラマ諭令』は、おそらく1771年ののち、ある種の貴重な物品と見なされ、新疆に帰還するトルグート人が携帯してきたものであろう。

2件目のチベット語文書について、筆者は『ネーチュン護法神のトルグート衆生への諭令』という題をつけた。この文献も、『鉄猪年ダライラマ諭令』と類似して、複雑な仏教的文辞によって書かれている。しかし最大の問題は、この文献には年月の署名がないことである。文献の内容から、文書の発行者がチベットのネーチュン寺(gnas chung dgon)のペハル(Pe har)護法神で、宛先がトルグート(Thor god)地方の衆生であることは分かる。文書の主な内容は、トルグート内の衆生に対して邪悪な勢力の脅威のもとにあっても仏教の戒律を遵守し、清浄な誓いを守るよう懇切に言い含める、というものである。

文書の中にあるペハル神は、ダライラマ5世が1642年にガンデンポタン政権を建てて以来、公的に認定された宣諭護法神である。ダライラマ5世がペハル護法神を尊崇したことにより、その意見は当時のチベット政府に重大な影響を与え、諸々の政治・宗教上の重大なことからについては毎度ペハル神に意見を尋ねた。例えば、ダライラマ・パンチェンラマなどの大活仏の転生靈童を探す際には、護法神の諭がしばしば重要な参考とすべき根拠とされた。ペハル信仰の起源については諸説あり、一説にはペハルはもともと北方のホル(霍爾)部落の守護神で、後に蓮華生大士の求めによりサムイェー寺で護法を担うことになった。別の説によると、ペハルはケサル王の攻撃により敗北し、サムイェー寺に拘禁されること七百年の長きに達したとされる¹。しかしダライラマ5世の在位期間、ペハルはサムイェー寺からデブン寺近くのネーチュン寺に移され、ダライラマ5世個人やニンマ派の淵源などの要素により、ペハルの政治・宗教上の地位が大幅に高まったことについてはおおそ確かであるといえる²。

¹ 王堯・陳慶英編：『西藏歴史文化詞典』西藏人民出版社，1998年，15頁。

² 米国の学者 Christopher Bell は博士論文の中で、ネーチュン護法神の儀式とその寺院制度について宗教史の観点から全面的な考察を行っている。ダライラマ5世の時期には、他の護法神と比べてペハルの地位が大幅に高まるという特殊な現象が見られ、Bell は家族の淵源、個人の修

注目に値するのは、文書の最初でネーチュン護法神がペハル神とトルグートの過去の因縁について「かの地のアルダルカブチュラマジャバ (al dar bka' bcu bla ma grags pa) が修した寺院のシュンデリン (gzhung sde gling) には、かつての我らのいっさいの面具が所蔵されている」と記されていることである。この話は、表面だけを見れば理解が難しいが、背後には豊富な情報が隠されていて、18 世紀後半における新疆トルグート部とチベットのガンデンポタン政権との関わりの過程を深く反映したものとなっている。

まず、ネーチュン護法神はトルグート人の寺院であるシュンデリンがペハル王の過去の面具を所蔵していることに言及しているが、これは実のところ政治と宗教を結びつける一種の修辞である。前述のようにチベット仏教徒は、ペハルがチベットのサムイエー寺に到来する以前には北方のホル部落の守護者であったと信じていた。ここにおけるネーチュン護法神のねらいは、明らかにトルグートとチベットの関係に宗教理論上の基礎を提供することにあった。このことからネーチュン護法神は、チベットのガンデンポタン内部において意見を尋ねる対象として重要であっただけでなく、モンゴルとチベットの間を橋渡しする重要な外交上の代表でもあったことが見えてくる。Giuseppe Tucci も詳しく指摘しているように、ダライラマ 5 世がペハル信仰を強力に支持した主な理由の一つは、ホシュートのグシ=ハンとの政治・宗教上の聯盟を強固なものとするにあった¹。

この文章のコンテクストを理解すると、シュンデリンを建てた「アルダルカブチュラマジャバ」とは結局どのような人物なのか、ということの問題とせざるを得ないだろう。この僧侶の高名は、千里以上も離れたところにいるネーチュン護法神すら聞いたことがあったほどである。『四オイラト史』・『蒙古遡源史』等のトド語史籍中の関連記述の発掘を通じて、「アルダルカブチ」はオイラトの高僧の一人で、その著作は 18 世紀以降におけるオイラトの史学の著述に影響を与えたことが確認できる。

ザヤパンディタとその弟子のヴォルガ河流域における活動

今のところ、トド語資料の文書中に現れるアルダルカブチの最も早い記録は、ガワンシラブ (蒙 Gawang Sirab / 蔵 Ngag dbang shes rab) が 1737 年に著した『四オイラト史』の中に見える。ガワンシラブがトルグートの起源を叙述する際、

習、転世の伝統、宗教制度、地縁政治という 5 つの要素から、ダライラマ 5 世がネーチュン護法神を強力に支持した原因を分析した。Christopher Paul Bell, *Nechung: The Ritual History and Institutionalization of a Tibetan Buddhist Protector Deity*. PhD Dissertation, Department of Religious Studies at University of Virginia, Charlottesville, 2013, pp. 316-327. を参照。

¹ Giuseppe Tucci, *Tibetan Painted Scrolls*, Bangkok: SDI Publications, 1999, vol. 2, p. 736.

アルダルカブチの言葉を引用し、「トルグートの含意は巨大な人々 (turuy-ud) である。アルダルカブチは、ペリというのはタングートである、と言う¹」と記している。このほか、ガワンシラブはチョロス (čoroš) 氏の起源伝説を叙述する際に、ドルベトとジュンガル部の祖先が嬰兒として天から一本の樹の下に降りてきたことに言及している。すなわち、樹の形が尖ったくちびる (čoryo) のようだったのでこの姓を得た、と。ここの箇所ではガワンシラブは再びアルダルカブチの見方を引用し、「ラシゴマンの領領師アルダルカブチは、あの子どもは野人である、といった²」と記されている。ここにアルダルカブチに関する重要なヒントがあらわれる。すなわち、アルダルカブチはかつて「ラシゴマンの領領師」(Rasi könmeng-ün unjad) を担当したのであった。トド語のいわゆる「ラシゴマン」とは、チベットのデプン寺のゴマン学堂 (bkra shis sgo mang grwa tshang) を指している。またトド語の「unjad」は実のところチベット語の「dbu mdzad」の対音語である。このことから、アルダルカブチはチベットのデプン寺の吉祥ゴマン学堂で学習し、「dbu mdzad」(維那師) の職位に就いたことがあることが分かり、ここからアルダルカブチ本人とチベットとのつながりを見て取ることができる。

ガワンシラブの著作のほか、バートル=ウバシ=トゥメン (Bayatur ubaši tümen) が 1819 年に著した『四オイラト史』の中にも、アルダルカブチの著作が引用されている。すなわち「ラシゴマン領領師アルダルカブチの歴史書に、オイラトがハザルバシに融合された、と記す³」とある。ここでバートルウバシトゥメンは、アルダルカブチの歴史書に直接言及しており、ここからアルダルカブチが一人の名僧であるだけでなく、影響力のある歴史家でもあったことが分かる。

19 世紀初頭の『蒙古遡源史』の中でも、アルダルカブチの生涯に関する重要な証拠があらわれる。『蒙古遡源史』の中には、ザヤパンディタ・ナムハイギャムツ

¹ トド語原文 : Töüni dotoro-ača turyüd kemëkü toryüd mön, aldar bkabačoyin jaliq-ača bayirai kemëkü tangyod mön. 噶旺希拉布著、巴岱・金峰・額爾德尼整理注釈 : 『四衛拉特史』, 『衛拉特歴史文献 (托忒蒙文)』新疆人民出版社, 1992 年所収, 244 頁。ペリとはカム地方のチベット族のいち部族で、今日四川の甘孜にはペリ寺 (白利寺 Pe ri dgon) がある。グシ=ハンは、ゲルク派を敵視するペリの土司トゥンユドルジェ (頓月多吉 Be ri don yod rdo rje, ?-1641) を打ち負かしている。17 世紀のペリ土司の政教活動と勢力範囲に関しては、Peter Schwieger, 「Towards a Biography of Don-yod-rdo-rje, King of Be-ri,」 in *Studia Tibetica et Mongolica: Festschrift Manfred Taube*, Swisttal-Oden: Indica et Tibetica, 1999, pp. 247-260. を参照。

² ここでの野人「almas」とは、伝説中の雪人で、チベット語では g.ya'dred といい、西洋人が俗に言うところのイエティ Yeti である。このほか「almas」には金剛 (vajra) の意味もあるが、この意味だと上下の文意と合わないと思われる。トド語原文 : Raši kűmenggiyin unjad aldar kabčotere köbüün almasi biye gebë. 噶旺希拉布 : 『四衛拉特史』, 『衛拉特歴史文献 (托忒蒙文)』所収, 247-248 頁。

³ トド語原文 : Öyilöd xajalbaş-tu singgeji arši gűmenggiyin unjad aldar kabču tükedën bičiji. 巴圖爾烏巴什圖門 : 『四衛拉特史』, 『衛拉特歴史文献 (托忒蒙文)』, 189 頁。

オ（蒙 Namka rgyamcho/ 藏 nam mkha' rgya mtsho, 1599-1662）がオイラト=イフフレーを建造したことに関する事績が記されている。またジューンガルとホシュートの戦争によりザヤパンディタの一部の弟子がトルグートに逃亡し、アユキ=ハンの執政時に自然と集まり、オイラト=イフフレーを再建したことに言及している¹。『蒙古遡源史』のこのくだりの最後では、「オイラト諸ハンがラブジャンバホトクトの高弟アルダルカブチに献上したシャビナルは、アルダルカブチのシャビナル（aldar kabči-yin šabınar）と呼ばれた²」ことに言及している。

『蒙古遡源史』のこのくだりの記述は、アルダルカブチがザヤパンディタ（すなわちラブジャンバホトクト）の優秀な弟子で、かつてオイラト諸ハンの供養を受けていたことをはっきりと記している。アルダルカブチはオイラト=イフフレーを西方のトルグートに移した人物であった可能性もあるだろう。『ザヤパンディタ伝記』の記載からは、ザヤパンディタ本人とトルグート首長層の間の密接な関係が分かる。例えば 1645 年春、ザヤパンディタはトルグートに移動し、ダイチンの子のために超度法事をおこなっている³。1654 年夏には、トルグートのダイチンが再びザヤパンディタのイフフレーをトルグート部にまねいた⁴。ザヤパンディタから直接教えを受けた弟子として、アルダルカブチとトルグート首長層との間にはつながりがあったはずである。『ザヤパンディタ伝』は、龍年（1688 年）の冬の初め、一人の「ゴマンラマがトルグートから帰来した⁵」ことに言及している。ここでの「ゴマンラマ」は、「ラシゴマン領領師」の称号をもつアルダルカブチである可能性が高い。『ザヤパンディタ伝』の記載によれば、オイラト=イフフレーは 1688 年にアイフス（Ayıyus）という名の冬営地に駐留したが、ここは今日のタルバガタイ山の南側とウルザル河（Urzar, 清朝文献では「ヤル河」）の上流一帯で

¹ これは 1676 年にガルダン=ボショクトが派兵してオチルト=ハンを攻撃した事件のことを指している。ホシュート部はそれまでオイラト=イフフレーの主要な施主であったが、おそらくこのことがザヤパンディタの圓寂後におけるジューンガルのオイラト=イフフレーに対する迫害へと結びついたと思われる。このことがおそらくザヤパンディタの一部の弟子がトルグートに逃亡し、イフフレーを再建する要因であったのだろう。オチルト=ハンの敗亡と、ジューンガル地域に残ったザヤパンディタの弟子に対する圧迫に関しては、ラトナバドラ（Radnabhadra）が『ザヤパンディタ伝記』のなかで生き生きと描き出している。刺徳納巴達喇著、成崇徳訳：『咱雅班第達伝』，中国社会科学院边疆史地研究中心編『清代蒙古高僧伝訳輯』全国図書館文献縮微複製中心，1990 年所収，47-59 頁を参照。

² トド語原文：Rabzamba xutuqtuyin erkin šabi aldar yabčatu, öyiröyın xāduuyın bariqsan aldar kabči-yin šabınar ene gezi keledēq. 『蒙古遡源史』，『衛拉特歴史文獻（托忒蒙文）』所収，320 頁。このほか、近年新発見の『蒙古遡源史』写本の原本に関しては、葉爾達：『《蒙古起源史》的研究概況与相關的若干問題』『蒙古學問題与爭論』（*Quaestiones Mongolorum Disputatae*），2014 年第 10 期，172 a-b 頁を参照。

³ 『咱雅班第達伝』7 頁，参照。

⁴ 『咱雅班第達伝』31 頁，参照。

⁵ 『咱雅班第達伝』55 頁，参照。

ある¹。

これらの記載を総合すると、ザヤパンディタの弟子であるアルダルカブチの活躍の年代は 17 世紀後半から 18 世紀初期にかけてであったことが分かる。彼はトルグート部で生まれ、チベットのデブン寺のゴマン学堂に留学し、ダライラマ 5 世等のゲルク派の指導者層と交流があった。1676 年、ジューンガルのガルダンとホシュートのオチルト=ハンの中で軍事的な争いが起こったことで、はじめザヤパンディタが建立したオイラト=イフフレーは甚大な打撃を受けた。しかしながら、これと同時期に、アルダルカブチはゴマン学堂を離れた後に、トルグートに戻りオイラト=イフフレーを再建したのであった。

清朝八旗制度下のオイラト=イフフレー

アルダルカブチがオイラト=イフフレーを西に移してから 100 年近くがたったのち、1771 年のトルグート人の東方への移動にともない、「アルダルカブチのシャビナル」も遠くヴォルガ河流域から新疆に移住し、清朝によってイリ地域に配置された。寺院の属民としての^{シャビナル}沙畢納爾²も、清朝の新疆駐防兵制のなかに組み込まれた。『西域水道記』・『清経世文統編』・『聖武記』等の清代漢文文献の中には、オイラト=イフフレーのシャビナルがイリに移住した後の社会の変遷と遊牧の範囲に関するおおよその記述がある³。例えば『西域水道記』には、「沙畢納爾部は、以前はトルグートとともにロシアのオチル河で遊牧していた。乾隆 36 年 (1771)、八百六十七人がトルグートにしたがって来帰し、^{オーロト}厄魯特の下五旗に編入された。彼らはただ黄教を習するだけで、徭役には及ばない⁴」とある。以上の材料から見るに、トルグートの東遷にしたがってきたシャビナルは、最初は賦役を担う必要がなかったようである。しかし清朝はその後、特殊な政治的考慮に基づいて、元々は寺院の属民であったシャビナルを引き離して、正式に朝廷の駐防兵制のなかに

¹ ボルジギダイ・オヨーンビリグ：「オイラト・イフ・フレーの冬夏営地とフレーションの遊牧地考」 窪田順平・承志・井上充幸編『イリ河流域歴史地理論集：ユーラシア深奥部からの眺め』松香堂，2009 年，77-79 頁を参照。

² 清朝漢文文献中の「沙畢納爾」とは、モンゴル語の šabi-nar のことである。字面上の原意は「徒弟」であるが、実際には寺院に従属する人という意味を含んでいる。

³ [清] 葛士濬：『皇朝経世文統編』巻 62，広百宋齋校印本，4-a 頁。[清] 魏源：『聖武記』巻 4，韓錫鐸・孫文良点校，北京：中華書局，1984 年，159 頁。

⁴ [清] 徐松：『西域水道記』巻 3，道光三年刻本，7 頁 a。

組み込んだ。

寺院の属民から駐防旗民へのシャビナルの身分の変化は、実際には清朝のデリケートな宗教・民族政策を反映している。中国第一歴史檔案館所蔵の満文『トルグート檔』によれば、清朝はトルグート僧侶の属民であるシャビナルを、だんだんと八旗駐防体制のなかに編入しており、チベット仏教のトルグート部に対する影響力を抑えようとしたことは明らかである。『伊江集載』と『新疆識略』等の漢文史料によれば、乾隆 37 年（1772）にトルグートの東方への移動にしたがって清朝に身を寄せたシャビナルは、最初は厄魯特の下五旗の 10 ニルに分割され、管理された¹。その後、イリ將軍シュヘデ（1710-1777）の上奏により、シャビナルが 10 ニルに分かれて暮らしているので集まって読経するのに不便なので、厄魯特の上三旗の額外佐領のなかから 4 人を出して、シャビナルを統一して 4 ニルを編成したいと願い出たという。漢文地方志の記載から見るに、清朝はトルグートの東遷にしたがってきたオイラト=イフフレーを、「公務に充当する必要はなく、旧制を遵守させて集まって読経する」ことを許しただけでなく、さらには「錢糧を支給して生活に資するように」した²。しかし満文檔案が反映しているのは、完全に異なる政治の現実であった。

満文『トルグート檔』に基づけば、シュヘデは清朝がオイラト=イフフレーのシャビナルを八旗に編入した本当の原因について、「一時的にイリに居住する人々の中のトルグートのラマ・ロブサンダンジン属下の一千二百余戸が、トルグート部の人々のなかに雑居しており、もしその状態が久しくなれば、彼らの人数が多いため、連れてきた衆は、勢いとして必ず彼ら（トルグート）をまとめるだろうから、これらの人々を抽出して、そのままとからラマを管轄していたところにとどめて、イリで土地を分け与えて彼らを配置しましょう³」と言及している。

¹ 『伊江集載』には、「乾隆三十七年（1772），將軍舒赫德奏言，投誠土爾扈特內安插伊犁之沙畢納爾人等共八百六十七名，歸入下五旗額魯特。添設副總管・佐領・驍騎校等官管束。欽奉恩旨，伊犁額魯特生齒日繁，又有隨土爾扈特投來沙畢納爾人等，著加恩賞給錢糧，以資養贍等因。欽此」とある。〔清〕佚名：『伊江集載』，『中國地方誌集成・新疆府縣誌輯』第 9 冊，鳳凰出版社，2012 年所収，605 頁。

² 『新疆識略』には、「乾隆三十七年，將軍舒赫德奏言：查入於伊犁厄魯特部落之各項喇嘛・沙畢納爾人等，前經具奏，編入總管碩通所管之下五旗十佐領下居住。此項沙畢納爾等，仍遵阿喇木佔巴胡土克圖旧制，令其聚集誦經，數月以來具皆安靜。惟查伊等在額濟勒時，尊奉黃教，曾與土爾扈特人等另居一處。今下五旗厄魯特人口倍增，官員甚少，恐管束或有不周。而此項沙畢納爾人等，在十佐領處分住，若令聚集一處誦經，實有未便。查現在上三旗厄魯特有額外佐領九員，請由其中挑出四員，將沙畢納爾之八百六十餘戶人口，編為四個佐領管束，仍著碩通總理，不必充當差使，令其一意尊奉旧制，聚集誦經，庶伊等益深欣感，永遠安靜。奉硃批：好，知道了。欽此。欽遵設佐領四員」とある。〔清〕松筠：『新疆識略』卷 5，道光元年武英殿刻本，21 頁 b～22 頁 b。

³ 乾隆三十六年七月初七，「諭舒赫德將喇嘛楚魯木達爾札等送往內地居住」，中國社會科學院民族研究所・中國第一歷史檔案館滿文部編『滿文土爾扈特檔案訳編』民族出版社，1988 年，67

ここから、シュヘデがトルグートのシャビナルの集中管理を奏請した本当の動機が、オイラト=イフフレーが集まって修学や読経をするのに便利かどうかではなく、数が多く分散して暮らすシャビナルがさらに多くの属民とまとまることを防ぐことにあったことが分かる。漢文地方志の『新疆識略』と比較した場合、満文檔案中の記載が本当の意味で清朝官員の政治的思惑をはっきりと反映している。

シュヘデ等の官員のほか、乾隆帝本人もトルグートの宗教指導者に対する態度が表と裏でまったく異なっていた。『清実録』の中では、トルグート人がやってきた際、乾隆帝は「ツェバクドルジが遣わしたゲロンは、すなわちラマである。我が天朝の定例では、およそ投降してきた各部の夷人は、その習慣を変える必要がない。汝らもチベットに行き熬茶（供養）することを望むなら、許さないことはない。いまチベットは我が版図に従属している。黄教のなかにダライラマ・パンチェンエルデニを超える人はいない¹」と述べ、自らのチベット仏教ゲルク派への一貫した尊崇をとくに強調し、それによりトルグートの使者を籠絡した。しかし乾隆 36 年（1771）8 月にシュヘデに送った満文上諭では、乾隆帝はトルグートの最高レベルの宗教指導者であるジャルグチラマ=ロブサンダンジン（Jaryučhi blam-a Lobsang danjin）について「ロブサンダンジンは残忍な一人の平凡なラマにすぎず、どうして活仏になれようか。彼の死後、彼の元々の属民が厄魯特アングのニル内にそのまま配置するのは絶対に不可である²」と述べ、極端なまでの不信を吐露している。乾隆 36 年 9 月の上諭の中では、ウバシとツェバクドルジの間のハン位をめぐる争いを処理するなかで、乾隆帝はツェバクドルジを支持するロブサンダンジンについて再び激しく非難し、「ロブサンダンジンは安寧な生き方をしている輩ではなく、（適切に）処置しなければ不利益が生じる³」と述べている。そして最後には、ロブサンダンジンを北京にとどめて、その属民を厄魯特アングに戻すという施策を決定したのであった⁴。これ以降、「アルダルカブチのシャビナル」は寺院勢力につき従う属民ではなくなり、朝廷の公務を担う旗民となった。ここから、トルグートが 1771 年に東遷した後、オイラト=イフフレーの政治・宗

頁。

¹ 『清高宗実録』巻 882，乾隆三十六年六月，北京：中華書局，1986 年，882 頁。

² 乾隆三十六年八月二十五，「諭署理伊犁將軍舒赫德安插羅卜藏丹增下屬事」，『滿文土爾扈特檔案訳編』，129 頁。

³ 乾隆三十六年九月十一，「諭署理伊犁將軍舒赫德对付策伯克多爾濟爭封爵之策」，『滿文土爾扈特檔案訳編』，135 頁。

⁴ 乾隆三十六年九月二十八，「諭舒赫德指派大臣分別照管來歸各部等事宜」，『滿文土爾扈特檔案訳編』，170 頁。原文の漢訳は「又有喇嘛羅卜藏丹增，並非一安分守己之徒，現已留住京城矣。將其屬下，不得並於誰人，乃授意於舒赫德等，將伊之正式喇嘛，列入伊犁喇嘛之內，將其其餘徒衆，均行編入伊犁厄魯特昂吉佐領，並由碩通管轄之。此事極關重要，全賴於舒赫德等之作為也」となる。

教上の地位には重大な変化が発生した。表面上では、清朝は依然としてイフフレーの宗教的伝統を尊重し、彼らが賦役を担うのを免除したが、実際には乾隆帝はトルグートの宗教指導者を勾留するという方法を通じて、最終的にはイフフレーのシャビナルを駐防八旗に編入するという目的を達成した。元々は輝かしい存在であったオイラト=イフフレーは、最後には属民の喪失と清朝による管理・コントロールにしたがってしだいに歴史の舞台からフェードアウトしていったのである。

おわりに：ユーラシアを横断する精神的な架け橋

オイラト=イフフレーは18世紀後半に、その勢力がしだいに衰退したものの、17世紀にザヤパンディタが創建して以来、オイラト=イフフレーはチベットとオイラト諸部をつなぐ重要なチャンネルとなったことは疑いない。ザヤパンディタの圓寂後、本当の意味でイフフレーを広げる事業をおこない、戦乱中に故郷を逃れる衆生を收容したのは、まさにアルダルカブチ等の人であった。では、一步踏み込んで言うならば、17世紀のトルグート地域におけるアルダルカブチの弘法事業は、結局どのような歴史的意義を持つと言えるだろうか。『ネーチュン護法神のトルグート衆生への諭令』のコンテキストに戻るならば、アルダルカブチが建造した寺院は、チベットとトルグートの間の精神的な架け橋となったことは明らかである。

まさにザヤパンディタ及びその傑出した弟子アルダルカブチ等の人によって遠くヴォルガ河流域のトルグート部に対しても不断に精神的気遣いが示されたことは、トルグート人がロシア帝国の長期にわたる圧迫下でありながらも宗教的アイデンティティを堅く保持し続けることに結びついたのであった。1730年、道の途中にはロシア帝国とジューンガル=ハン国などの強敵による度重なる妨害が満ちていたが、トルグートの使者は遠路を厭わずシベリアへと迂回し、遂には四川と中央チベットでダライラマとパンチェンラマに面会した。まさにこの強大な精神力は、最終的にトルグートが艱難を避けて1771年に部族を率いて東帰することの支えとなった。トルグートとチベットの精神面でのつながりは、『鉄猪年ダライラマ諭令』と『ネーチュン護法神のトルグート衆生への諭令』の2件の文書のなかに十分に体现されている。

ISSN1349-7510

QUAESTIONES MONGOLORUM DISPUTATAE

XIII

Executive Editor

B. OYUNBILIG

in collaboration with

H. FUTAKI & W. R. SHEN



International Association for the Study
of Mongolian Cultures
Tokyo 2017

ISSN 1349-7510

QUAESTIONES MONGOLORUM DISPUTATAE (QMD)

No.13 (2017)

July 15. 2017

Tokyo

International Association for the Study of Mongolian Culture

c/o

School of Chinese Classics, Renmin University of China

No.59, Zhongguancun Road Haidian Dist., Beijing 100872, China

bilig63@126.com & shenweirong@yahoo.com

Faculty of Foreign Studies

Tokyo University of Foreign Studies

3-11-1 Asahicho, Fuchu-shi, Tokyo

183-8534 Japan

hfutaki@tufs.ac.jp

Articles in the QMD represent neither the views of International Association for the Study of Mongolian Cultures nor those of the editors, but only those of the signing contributor, and responsibility for opinions expressed and for the accuracy of facts published in articles rests solely with the individual authors.